

果樹

実況

1 ウメ

(1) 生育状況 (園芸研究センター)

今年の梅雨明けは7月21日頃で、平年より3日早かった。7月6半旬から8月2半旬は、気温の高い日が続き、平年より降水量が少なかった。一部で葉の萎れが発生している。

(2) 地域状況

若狭町では、イラガ類が7月末から、モンクロシャチホコが8月上旬から発生している。特に、モンクロシャチホコによる食害が旧盆以降急速に拡大してきている。

7月下旬から白干梅の天日干しが進められている。

2 ナシ

(1) 生育状況 (農業試験場)

8月11日現在の「幸水」の果実肥大(横径)は、96.9mm(平年82.2mm、前年87.0mm)であり、平年・前年より大きい。収穫開始は8月12日(前年8月18日、平年8月17日)で、8月末まで続く見込みである。

8月21日現在の「豊水」の果実肥大(横径)は、94.1mm(平年84.6mm、前年88.3mm)であり、平年・前年より大きい。収穫は平年より早い8月末から始まる見込みである。

ハダニ類の発生がわずかに見られるが、その他に目立った病害虫の発生はない。

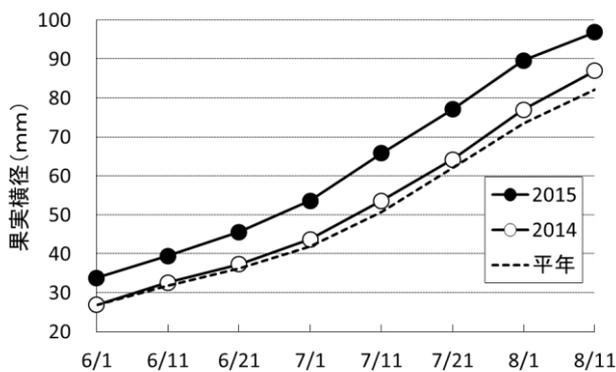


図1 「幸水」の果実肥大(福井農試)

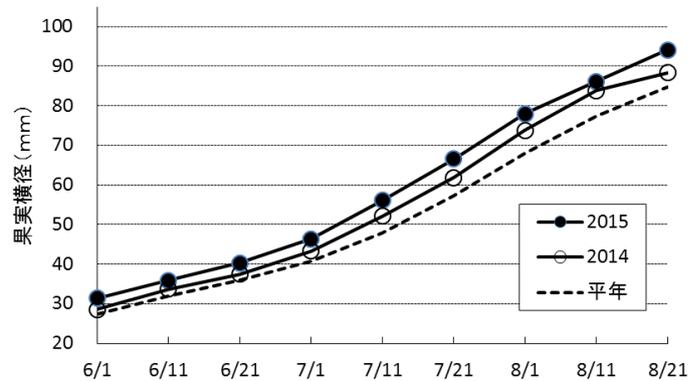


図2 「豊水」の果実肥大(福井農試)

(2) 地域状況

坂井管内における8月27日現在の「豊水」の果実肥大(横径)は93mmで、昨年・平年より4mm大きい。

「幸水」の集荷が8月6日から始まり、4Lサイズが中心になっている。集荷のピークは22日頃と見られる。「豊水」も8月下旬から集荷が始まっている。

3 カキ

(1) 生育状況 (農業試験場)

8月21日現在の果実肥大(横径)は、「刀根早生」が74.7mm(平年67.4mm、前年68.8mm)であり、平年・前年より大きい。「平核無」は75.4mm(平年67.2mm、前年70.4mm)であり、平年・前年より大きい。

目立った病害虫の発生はない。

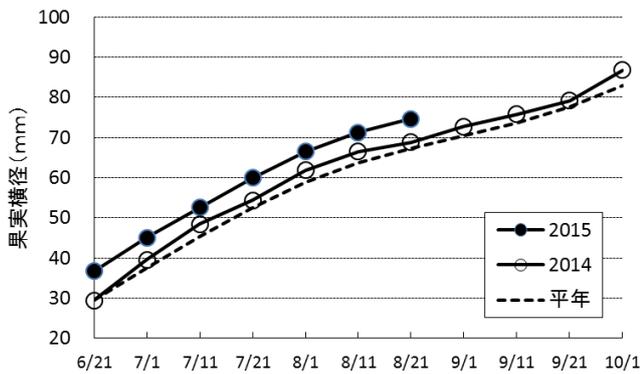


図3 「刀根早生」の果実肥大(福井農試)

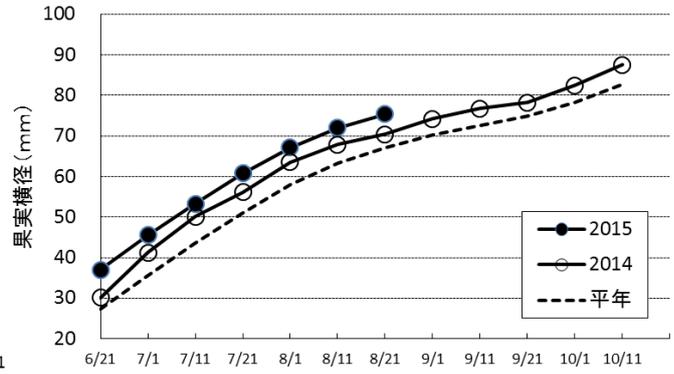


図4 「平核無」の果実肥大(福井農試)

(2) 地域状況

坂井管内における8月27日現在の果実肥大(横径)は、「刀根早生」が74mm(前年69mm、平年65mm)、「平核無」は72mm(前年70mm、平年72mm)になっている。

4 イチジク

(1) 地域状況

若狭地区では、8月上旬から成熟に達した果実が見られるようになり、盆前に集荷が集中しない年となった。現在、6~9段目の果実を収穫している。

5 ブドウ

(1) 生育状況 (農業試験場)

露地栽培の収穫期は、「サニールージュ」が8月10~24日(前年8月22~25日)、「ブラックビート」が8月19~24日(前年8月22~25日)であった。「シャインマスカット」は8月24日(前年9月5日)から収穫が始まった。

(2) 地域状況

ハウス栽培では、「サニールージュ」が7月下旬から、「ブラックビート」で7月下旬から、「藤稔」が8月中旬から、「シャインマスカット」で8月上中旬から収穫が始まっている。

高温乾燥の影響でハダニの発生が目立った。

対策

1 各樹種共通：台風対策

本格的な台風シーズンを迎える。気象情報に十分注意して、台風の接近・襲来による被害が予想される場合は、以下の対策を行う。

(1) 風が強まるまで

A. 全樹種共通

豪雨によって冠水や滞水する恐れのある圃場では、排水路の点検・清掃・整備・補修を行う。

収穫期に達している果実は台風襲来までに収穫を行う。ただし、未熟果の収穫は行わない。

B. ナシなど露地棚栽培果樹

棚面の動揺を抑え、果実のキズを防ぐために、あおり止め等の点検を行う。ネットで被覆している場合は、ネットの固定紐を確認する。台風情報に注意し、ネットおよび棚が破損するような極めて強い風が予想される場合は、風が強くなるまでにネットをはずす。

C. ブドウなど施設栽培果樹

ビニールハウスの点検を行い、必要か所の修繕を行うとともに、ハウスバンドを締め直す。

台風が接近して強い風が吹いている時は、天窗や入口を閉めハウス内に風を入れない。

ハウスの周囲に設置してある防風ネットや支柱を点検し、ネットが破れたり飛ばされたりしないように補強する。

D. カキ、ウメなど立木果樹

強風による倒木や主幹部の損傷を防止するために、支柱等により主幹を固定する。特に、幼木や根の浅い樹種は根こそぎ倒れやすいので注意する。また、枝の揺れによる果実の傷や落果を防ぐため、風当たりの強い部位の枝を中心に支柱の点検や設置、補強を行う。



写真 強風によるウメ若木の倒伏

(2) 台風通過後

倒伏した幼木や若木はすみやかに立て直し、支柱などで固定して根元に土寄せする。枝が裂けた場合は傷口を合わせて結束する。折れた場合は、健全部まで切り戻して癒合剤を塗布する。

ナシ・カキ等、着果がある樹種は園内を見回り、傷付いた果実を摘果する。風雨によって病害の発生が増加すると予想される場合には、農薬登録内容に従って殺菌剤を散布する。

圃場に滞水している場合は、側溝の落ち葉や土砂を除去し、園内に浅い溝を掘って表面水をすみやかに園外に排出する。

ハウス栽培では、強風が去った後はすみやかにビニールを開放し、温湿度の上昇を防ぐ。

2 ウメ

(1) 間伐、夏季せん定

樹冠の混み合った園では、日当たりを良くするために間伐を行う。

「新平太夫」・「福太夫」は、「紅サシ」に比べ樹勢が強いため、徒長枝が多数発生し、樹冠中心部が暗くなりやすい。適度な夏季せん定を行うことで、花芽の着生を促進し安定多収が図られるとともに、風雨による枝梢の折損軽減につながる。

(2) 芽接ぎおよび高接ぎ後の枝梢管理

今月中旬までは、芽接ぎによる高接ぎ(品種更新)の適期である。【詳細は8月の情報を参照】

前年夏に芽接ぎを実施もしくは今年の3~4月に切り接ぎを実施し接ぎ穂から伸長した新梢は、接ぎ木台(紅サシ・剣先)の枝幹を利用して誘引し、骨格枝候補の養成に努める。接ぎ木台から発生している枝のうち接ぎ穂の新梢伸長を邪魔するような枝や日当たりを悪くする枝は適宜切除する。

(3) 病虫害防除

数日に1回は園内を見回り、環紋葉枯病や葉炭そ病、ウメシロカイガラムシなどが発生していないか注意する。9月上旬頃からウメシロカイガラムシの第三世代の発生時期になるので、多発している園ではアプロード水和剤またはアプロードフロアブルにより防除を実施する。

また、モンクロシャチホコなどチョウ目幼虫のふ化時期なので、早期発見に努め、分散前の若齢幼虫時に捕殺する。

(4) 花芽肥の施用

花芽を充実させ枝梢の貯蔵養分蓄積を促進させる目的で、成木の場合、10 a 当たり窒素成分で6 kgを目安として有機質配合肥料を施す。土壌調査の結果からリン酸やカリ分が圃場に過剰に蓄積している圃場で、礼肥に硫黄被覆尿素を施用した場合は発酵鶏糞を10 a 当たり60kg程度施す。

(5) 植え穴の準備

新植や改植の準備は、土壌が乾燥していて作業がしやすい早めの時期に取り組む。

改植の場合は、古い樹の抜根をていねいに行った上で、植え穴の準備を行う。

植え穴の準備として、縦1.0m×横1.0m×深さ0.5mを掘り上げる。掘り上げた土の山に、堆肥、ようりん、石灰類等の土壌改良資材をふり掛け、土と十分に混和しながら埋め戻す。

植え穴の準備は、定植1か月前までに完了しておく。

(6) 一次加工（天日干し・選別・樽詰め）

作業に際しては手洗いや室内清掃に努めるとともに、髪の毛など異物の混入を防ぐために必ず帽子、マスク、サニメント（衛生）手袋を着用する。【詳細は8月の情報を参照】

3 ナシ

(1) 「豊水」の収穫

「豊水」は樹による熟度の差が大きく、同一樹でも着果部位によって熟度が異なる。また、早採りすると酸味が強いために甘みを感じにくく、市場での評価を落とすことになるので、十分に熟度を見極めて収穫を行う。収穫初期は果色の進んだものを収穫し、後期は過熟にならないように注意しながら収穫する。

収穫や運搬の際には、スポンジなどの緩衝材を果実コンテナに入れ、果実にキズが付かないよう注意する。また、果実が日光の直射を受けないように、ゴザなどで果実コンテナに日除けをする。

(2) 礼肥

礼肥は果実生産によって低下した葉の機能回復と貯蔵養分の蓄積を目的として施用する。収穫が終わり次第、すみやかに施す。「幸水」、「豊水」では窒素成分で10 a 当たり4～6 kgを目安とし、硝酸態窒素主体の速効性肥料を施す。

(3) 病虫害防除

赤ナシでは黒星病、二十世紀では黒斑病に対して収穫後の防除を行う。芽のりん片にこれらの病原菌が感染し、翌春の伝染源となる。特に、芽がしっかりしていない発育枝の先端部は感染の危険性が高いので、収穫直後に先端まで十分薬剤がかかるように散布する。

ハダニ類の多発園ではダニ剤を散布する。また、バンド誘殺の実施時期である。下旬にかけて主枝または垂主枝の中央部にクラフト紙を巻き付ける（クラフト紙等は12月～2月に取り外して焼却処分する）。

4 カキ

(1) 不良果の摘果

上向き果で直射日光を受けて日焼けした果実や病害果・虫害果・変形果・小玉果・キズ果は、樹上選別として時間が許す限り収穫直前まで随時摘果する。

(2) 汚損果防止対策

肥大が緩やかな時期を経て9月に入ると肥大が進む時期を迎える。成熟期近くの果実肥大は表皮に亀裂が発生し、降雨や多湿条件、薬剤散布により亀裂部が黒変しやすくなる。汚損果防止のために、防風垣の刈り込み・徒長枝の除去・密植園では間伐を行い通風の改善をはかる。

土壌管理では、草刈りを励行し、園地の湿度を下げるようにする。また、汚損果の効果的な対策として反射マルチの敷設がある。日射が弱くなる9月上旬から「有孔シルバーマルチ」を敷設すると、着色向上や園内の湿度低下による汚損果の防止が期待できる。ただし、最高気温30℃以上の条件では、日焼け果等の障害が発生するので、気象情報に注意してマルチ敷設時期を決定する。

(3) 主枝・亜主枝の補強

収穫1か月前頃から果実は急速に肥大する。果実の重みで主枝・亜主枝が分岐部から裂開したり、着色部位の受光が妨げられたりすることがあるので、突っ支い棒(つかいぼう)等により枝を支える。

(4) 病虫害防除

カメムシ類の発生が多い傾向であり、各圃場で発生の有無を確認し、必要な場合はダントツ水溶剤等で防除を行う。また、アザミウマ類は9月中旬頃まで加害が続くので、農薬の登録内容に基づいて防除を行う。ただし、コテツフロアブルを着色期に散布すると、薬害(果皮の緑斑)発生の可能性があるため、着色期以降は他の薬剤を用いる。

5 イチジク

(1) 収穫

収穫の判定は、果実の下垂程度、着色度、果肉の硬さから判断する。福井農試で作成した果実カラーチャートを利用すると便利である。【詳細は8月の情報を参照】

(2) 病虫害防除

収穫期に降雨が多かったり、過熟果を取り残したりしていると酵母腐敗病が発生する。病原体の酵母はショウジョウバエ類(小型のハエ)によって媒介され、園全体に広がりやすい。ショウジョウバエの防除薬剤はあるが、いったん発生すると根絶は困難になる。収穫時に過熟果を見逃さないように注意して、発生を未然に防ぐことが重要である。酵母腐敗病が発生した果実は、園から離れた場所で埋設処理する。

6 ブドウ

(1) 礼肥の施用

収穫が終わった品種から随時、礼肥を施用する。礼肥は貯蔵養分の蓄積が最大の目的で、無核栽培を行う場合は貯蔵養分を高める必要がある。大粒品種では、窒素成分で10a当たり1.5kg程度を硝酸態窒素主体の速効性肥料により施用する。施用量は樹勢により加減する。

(2) 縮間伐の実施

棚面が暗いと葉が黄化したり、着色不良になりやすい。副梢が秋まで伸びるなど樹勢が強い場合は、計画的に縮間伐を行う。収穫が終了し、葉の残っている時期に行い、大きな切り口には癒合剤を塗布する。

(3) 病虫害防除

病虫害の発生が多かった場合は、越冬病虫害の密度を低くするため、全品種の収穫終了後に防除を行う。防除と併せて新梢の充実効果が期待できるボルドー液の散布も有効である。

特に主枝延長中の若木では、ブドウトラカミキリが新梢中で繁殖しないように、スミチオン水和剤40を9月下旬以降に予防散布する。